真実の朝鮮近現代史（東洋倫理の敗北）２０１９・３・１９　浅井壮一郎

朝鮮近代史年表

１８６８年　：　明治維新
１８７１年　：　日清修好条規
１８７３年　：　**国王親政**：**大院君失脚**：実権は王妃の閔氏一族に移り、世道政治復活・財政悪化・腐敗復活。
１８７６年　：　日朝修好条規　朝鮮開国
１８８２年　：　壬午軍乱
１８８４年　：　**甲申政変　　１８８５年　：　脱亜論**
１８８６年　：　北洋艦隊、長崎入港。長崎事件。　海軍力比較　日：３８１８トン　清：２３４１０トン
１９９４年８月：**日清戦争　　１８９５年１月**：**甲午改革　　１８９５年４月**：**下関条約締結**
１８９５年１０月：**閔妃事件**　⇒　大院君と訓練隊が政権掌握。　**１８９６年２月：露館播遷**
１８９７年　：　大韓帝国成立
１９０４年２月：**日露戦争　　１９０５年**９月：**ポーツマス条約**調印。
１９１０年８月：**日韓併合**

日朝修好条約　１８６８年　「明治維新」通告を朝鮮へ。朝鮮は受け取り拒否。

１８７２年、「廃藩置県により対馬藩消滅。外交窓口変更」を通知。朝鮮拒否。

１８７３年、朝鮮漂流民を送還し、国書を捧呈。だが、漂流民だけ受け取り、他は拒否し、使節宿舎に罵倒の貼紙。「日本人は夷狄と化し、禽獣にも劣る」「日本人と交わる者は死刑」。度重なる無礼対応に世論激高。政府は宗主国の清国に善処を要請。清は「朝鮮は属国でない」と応えた。これにより「征韓論」が沸騰。そこへ岩倉使節団が帰国し、欧米事情を見てきた彼らは「国力充実」が先だとして、征韓論を押さえ込んだ。

１８７４年７月から清の圧力により日朝交渉再開。朝鮮側は日本国書を受け取り、翌年には国交締結を約束。だが翌年には服装問題を持ち出し拒否。雲揚号事件はこの直後に起こる。世論激高。明治政府は再び清と交渉。

実は**１８７１年に日清修好条規が締結されていた。**清は朝鮮の扱いに苦慮した。朝鮮を属国とすることは危険だった。背後に**１８６６年の仏宣教師虐殺事件**があった。前例として１８６２年、既にヴェトナムでの仏宣教師殺害の報復として、仏が安南を占領。更に華南における仏宣教師殺害の報復として、**アロー戦争**に便乗して、英とともに北京を占領。円明園を徹底的に破壊・略奪した。清のジレンマは、朝鮮を属国とすれば、仏から朝鮮の残虐行為に対し報復される可能性があり、「朝鮮は、国際法上は属国ではない」とした。その実を示すために、まず、日清修好条規を結び、日本を独立国として承認し、この日本と朝鮮との間で日朝修好条規を結ばせ、朝鮮を独立国家として認めさせようとした。（渡辺惣樹　『朝鮮開国と日清戦争』　草思社　２０１４　）

１８７６年　清の指示で朝鮮は修好条規を受け入れ。明治政府は黒田清隆を派遣。たが文書に国王印を拒否。黒田は交渉を打ち切ると通告。朝鮮側は国王印を了承、条約が締結。その後、遣日使節派遣。だが彼らには朝鮮の開国は清の指示によるものであり、日本に対して「兄」の立場で付き合うという傲慢な姿勢があった。

日本の史書は「明治維新の通告文書その他が拒否されると、日本は軍艦雲揚号を派遣し、威嚇する。雲揚号のボートが江華島の砲台から砲撃されると、雲揚号は反撃し、砲台を占領。侮った日本は、翌年、全権黒田清隆が艦船６隻、海兵２６０を率いて江華島に進出し、欧米列強のまねをして砲艦外交で無理やり　朝鮮を開国させた」「日本の真の意図は国交樹立ではなく、戦争にあるとの疑念が生まれた」と記述する。**１８７１年の日清修好条規締結**も、清国は日本の近代化、特に軍備に脅威を感じており、中国侵略を阻止する狙いがあったと記す。（趙景達『近

代日朝関係史』）

清も朝鮮も依然傲慢であったが、日清は朝鮮を近代化して、日清朝の三国東洋連合で、西欧、特にロシアの南下に対応しようとする点では一致していた。それを朝鮮は常に台無しにした。
１８８０年　朝鮮使節団が訪日。この使節に清国公使館は**「朝鮮策略」**を渡す。内容は「ロシアの脅威に対抗するためには日本との関係を強化し、米国と結ぶべきである」。

壬午軍乱　閔氏政権の腐敗に対し、軍と大院君勢力が反乱を起こし、**別働隊が日本公使館を襲った。**清は大院君を捕えて中国へ連行。以後、清は**宗主権強化を本格化**する。**つまり、属国化する。**

甲申政変　親日急進開化派のクーデ・ター。日本公使は高宗の依頼により宮殿護衛。高宗は感謝。だが清の迅速な対応により失敗。**公使館も襲撃された**。清は袁世凱を漢城に常駐させ、朝鮮の**直接支配**を目指す。袁世凱は国王・政府を指導する強い権限が与えられた。閔氏政権はロシアに接近。有事の際にはロシアに保護を求める秘密協定が明るみに出る。袁世凱はこの動きを潰す。

この甲申政変も**日本史書**は日本公使が急進開化派に接近し、公使館守備の日本軍１個中隊をクーデ・ターに参加させ、政権を奪取したが、清軍に制圧された。事変後、日本は２個大隊を朝鮮に派遣し、公使館の損害賠償を強要したと記す。当時、漢城には１０倍の清軍が駐屯していた。１個中隊程度で日本が主導権を握れるわけがなかった。日本は国王の依頼に基づいて行動しただけであり、**日本国公使館を破壊**し、日本国民を殺害した責任は朝鮮側にあると主張した。朝鮮は日本の要求を受け入れた。その背景には米仏の支援があり、特にフランスは軍事支援を申し出ていた。

脱亜論　福沢諭吉は朝鮮近代化を支援した。だが腐敗した朝鮮に落胆し**脱亜論**を発表。「支那・朝鮮に対して西洋のやり方に習うべきであり、**隣国とかアジアの同胞であるからといった感情を持ち込むべきでない**」と主張。それは朝鮮・清への絶望だった。福沢は朝鮮人の裏切りに愛想をつかした。**兪吉濬**は慶応義塾の最初の留学生で、福沢の家に寄宿した。だが彼は日本を過小評価し、最初の西洋文明媒介者としての日本の実績を軽視し、アメリカに渡る。兪吉濬は『西遊見聞』を出版した。だが『西遊見聞』の半分は『西洋事情』からの丸写しで、その他も、福沢の著作に由来するものだった。福沢は兪吉濬の出版を支援し、金銭援助もした。（アンドレ・シュミット『帝国の間で』）

長崎水兵暴行事件　甲申事変後、清国は日本を威嚇する。清には近代化した北洋艦隊があった。**１８８６年**に北洋艦隊が長崎に入港。清の水兵が横暴を極め、長崎住民との大規模な衝突に発展した。日本側は巡査２人が殉職、２９名が負傷した。清側も４名が死亡し、４６名が負傷した。この事件では、日本は非力で裁判権を行使できなかった。**【海軍力比較　日：３８１８トン　清：２３４１０トン（１８９１年）**で全く歯が立たなかった**】**その後、日本はアメリカ顧問団の指導により、清艦艇より、速く、射程の長い４０００トン級の三景艦（松島・橋立・厳島を建造、さらに吉野を購入）で対抗。黄海開戦で勝利した。

日清戦争　　戦争中に日本は国政改革を要求し、**「民法の制定」**で**「身分制廃止・私有財産制度」を確立。これは両班支配層の最も恐れる改革だった。**
下関条約　　日清戦争終結。**朝鮮独立**。３日後に**三国干渉**。日本は要求に屈服。**日本の弱腰を見た朝鮮は、閔王后を中心にロシアに接近、親露派勢力形成**。政治主導権をロシアに奪われる。その直後に三浦梧楼が公使として着任。三浦は朝鮮情勢の急展開に驚く。陰謀の中心・閔王后排除による日本の挽回を謀る。

閔妃事件　日本軍は大院君を担ぎ出し、王宮に侵入し、王后を殺害し、遺体を焼き払う。だが政権を握ったのは大院君だった。イサベラも主役は大院君で、赴任直後で現地情勢に疎い三浦梧楼は乗せられたと見る。事実、国王は各国公使に王宮警備を日本軍にと懇願した。政権は大院君が掌握。国王は監視下に置かれた。明らかに大院君のクーデ・ターだった。**この事件も日本の教科書は、日本帝国主義の悪逆非道の仕業とする。**だが各国公使は日本軍が王宮を占拠するように勧めて、事態収拾を試みる。ロシアは国王の安全を日本に要求したほどだった。以上が、イサベラが語る「閔妃暗殺事件」の顛末である。

露館播遷　１８９６年１月、親露派は、ロシア水兵の助けを借りて、高宗をロシア公使館に移し、政権を奪取し、親日派を粛清。

真 実 の 日 韓 関 係

最大の問題　韓国人犯罪の現状　『犯罪白書』（平成１１～１９年）　：　外国人犯罪者の検察庁受理人数は９年で総計１８４，０８６人。８０％以上がアジア人で１５３，４６７人、中国人が７４，３９７人、韓国・朝鮮人が２５，８３６人。これは外国人永住者を含まず、交通違反を含まない。人口比でみれば、中国人は１０万人当り６人、韓国人は１０万人当り４３人で最悪。一方、日本人の外国での犯罪は交通違反も含めて、全世界で毎年５００人程度。９年間では４５００人で世界最良である。これを全世界１８０国で割れば、一国当り、僅か２５人。

これは彼等の「犯罪侵略」である。彼等の悪意の根源は何なのか。日本の植民地支配に対する復讐なのか。だがもう戦後７０年。日韓条約も結ばれ、互いの債権債務も帳消しにし、その上で多額の経済援助までした。それでもまだ続くとしたら、韓国人の歴史認識、教育の実態が問われなければならない。

主な『朝鮮近現代史』

韓国の歴史研究の泰斗、**韓永愚の『韓国社会の歴史』**は、**南満州と中国東北部を含めた地域を「歴史的領土」とし、韓国人の活動舞台として、その歴史は約４０００年前に開始された**とする民族主義の立場で書かれた。

彼は『朝鮮紀行』を無視し、日清・日露戦争を語らず、日本による改革・**民法の制定**についても語らない。

カミングスはシカゴ大学教授で朝鮮女性と結婚した。彼の**『現代朝鮮の歴史』**は１９９７年に出版された。「朝鮮は１９４５年まで植民地として搾取された」という立場で書かれた朝鮮近現代史。

「近代朝鮮には商業、科学、技術等が欠落していた。それなのにどうして現代朝鮮は近代化できたか」と問題提起した。その根拠を「朱子学」とし、「人は身分に応じて職分を果すべき」というもので「位階制」と「不平等」を肯定し、権力の濫用のない理想的な朱子学的秩序を想定した。だが朝鮮では「国庫収入を確保しようとする官僚と地主・農民との葛藤は、朝鮮王朝の緊張の源泉だった」という。これでは「権力の濫用のない秩序」などどこにあったのか。更に彼は「支配層は官僚機構を支配し、それをある程度弱め、王権を抑制する手段とした」という。これは王朝収入を腐蝕する両班の腐敗を正当化する論拠である。事実、『朝鮮紀行』には「国庫には税収の３分の１しか入らないが、これは徴税吏が腐敗しているからだ」とある。

カミングスは「李朝は美しい文化国家」を前提とし、「近代化・開国はその破壊者だ」と主張する。

イサベラ・バードの『朝鮮紀行』は日清戦争時代の朝鮮の紀行見聞録で、朝鮮王朝の腐敗が随所に記録され、両班を**「免許皆伝の吸血鬼」**と罵しる。この見解は当時の西欧人の共通の見解で、イギリス公使ヒリアーの「腐敗しきった朝鮮は保護状態に置かれることが絶対必要で、日本の改革努力は乱暴だったが、真摯だった」というのも共通見解だった。これは朝鮮人にはもはや統治する能力がないとする**他律性史観**で、西洋人の共通見解だった。

『朝鮮紀行』は同時代史料である。主な朝鮮近現代史は１００年後に書かれたもので、日清・日露戦争以前の歴史を無視し、『朝鮮紀行』を無視し、李朝末期の腐敗を無視し、美しい文化の国と美化する。こうなると結論は「美しい文化国家を野蛮な日本が破壊した」ということになる。

イサベラ・バードの朝鮮近代史観　彼女は『朝鮮紀行』において、徹頭徹尾、両班官僚の腐敗を糾弾する。

「朝鮮の官僚は私利私欲のために、民衆を苦しめ、私腹を肥やす。彼等は敖慢で、虚栄心が強く、姦通に耽り、貪欲である。そして平和時には媚びへつらい、有事の際には逃げ出す」。李承晩も両班だった。朝鮮戦争の際に真先に逃出した。最近のセオウル号船長も同様、両班の性癖は変らない。

「朝鮮は資源もあり、潜在力があるが、国民の活力は眠ったままで、上流階級は怠惰で、中流階級は出世できない。全てが低く貧しくお粗末なレベルだ」

「特権階級による搾取、司法の不在、腐敗する政府、策略を廻らす泥棒官僚、最も腐敗した帝国（中国）との同盟関係、こういったものが総合して、国をうんざりするほど汚らしい状態にした」

「たかりを恥としない。官位が売買され、内紛や暴動が頻繁に起きるがほとんど失敗する。朝鮮の革命家は信念を支えに命を張ろうとしない」「朝鮮の政変は、政治理念の争いではなく、官職・地位の争奪戦に過ぎない」

「農民は懸命に働くが、よい生活をする事に恐怖を擁いている。両班官僚が税を無法に取り立て、無理やり借金を強要し、踏み倒すからだ」

「朝鮮には階級が二つしかない。盗む側と盗まれる側である。**両班官僚は公認の吸血鬼**であり、人口の８０％を占める下人は吸血鬼に血を提供することをその存在理由とする」

「日本は日清戦争以後、隣国が破滅するのを黙って見過すわけにはいかず、大変なエネルギーをもって改革に努力し、身分制社会に大変革を起こした。日本が並々ならぬ能力を発揮した」

「日本が徹頭徹尾誠意を持って奮闘した。経験が未熟で、荒っぽく、買わなくてもよい反感を買ってしまったが、日本に朝鮮を隷属させる意図はなく、朝鮮の保護者としての役割を果そうとした」

彼女は両班支配階級を厳しく見つめ、憎悪を持って糾弾し、一般民衆にも視線を向け、実地に調査し、朝鮮人の能力の優秀さに気付き、これを高く評価した。次ぎのようにいい切る。

私は朝鮮の前途に全く憂えていない。ただそれには二つの条件が必要である。

・　［条件Ⅰ］「朝鮮は内部から自らを改革する能力がなく、外部から改革されなければならない」
・　「条件Ⅱ」「国王の権限は厳重かつ恒常的な抑制を受けなければならない」

これは明らかに「他律性史観」で、当時の各国公使等の外国人の共通の認識だった。

日清戦争において、彼女が最も注目したのは清軍の士気喪失と官僚の腐敗だった。医療救急隊もなく、傷病兵は身ぐるみはいで置去りにする軍隊。兵站部は不正を働き、軍需物資を売って自分達の儲けにしてしまう。飼料・食糧はほとんど無く、兵士は勝手にものを盗み出し、輸送用の馬を食べる。満州軍は天下御免の強盗団だった。

日本軍は軍規厳正だった。彼女は日本占拠後の仁川の繁栄振りを見た。物価は上がったが、給料も二倍となり、何よりも搾取がなくなり朝鮮人が自発的に働き、驚くほど治安が回復していた。

１８９５年、彼女は朝鮮の歴史に広く影響を及ぼす、異例の式典を目撃する。官僚腐敗という積年の弊害の一掃を図る日本は、国政改革を要求し、それを誓う誓告式を執り行った。

重要な改革が「民法の制定」だった。これは「身分差別撤廃」「私有財産制度」「所有権絶対の原則」「契約自由の原則」を全国民に均しく適用することだった。これにより、官僚（両班）の無法を防ぎ、蓄財を可能にした。「民法」は「朝鮮近代化」の原点で支配層の最も恐れる改革だった。彼等の抵抗を押し切るには日本公使井上馨という強力なサポートが必要だった。

イサベラは「私は、この改革が井上伯のような申し分のない権威に擁護されていることをうれしく思う」と述べている。彼女は、私利私欲を捨て、ひたすら朝鮮王国のために、旧勢力と戦う日本人の姿を評価している。

李榮薫の『大韓民国の物語』　実はそれ以前に**『解放前後史の認識』**があった。この本は、**毛沢東思想と北朝鮮の主体思想に**基づいて書かれた。**教科書『韓国近現代史』はこれに基いて書かれた。**李榮薫の執筆理由は「社会主義が失敗したにもかかわらず、左翼民族主義だけは、依然として韓国社会で生き続けている」からだった。

李榮薫は**「李朝の滅亡は、両班の国が滅んだのだ」**と断言する。李朝は**民の国**ではなかった。近代韓国史は、この前提で、始めて理解できる文明史の一大転換だった（身分制から四民平等へ）。この視点に立ち、李榮薫は植民地時代を見直す。この時代の韓国人の歴史認識は**収奪**だった。教科書は「**日本は比類ないほど悪辣な方法で収奪した。土地調査事業を通して農地の４割を奪い、日本人に払い下げた。警察や憲兵が銃剣を突き付けて収穫の半分を収奪し、輸出した。戦時期には６５０万人の朝鮮人を強制連行し、賃金も与えず、酷使した。朝鮮の乙女たちが挺身隊という名目で動員され、慰安婦にされたが、その数は数十万人に達した。**」と記述する。

李榮薫は「これは事実ではない」と言い切る。米輸出は日本内地の米が３０％ほど高かったからで、経済行為で収奪ではない。しかも高く買ったので朝鮮が潤い、所得が増え経済が成長した。この間の経済成長は年平均３．７％で、世界的に高い水準にあり、人口増加率が１．３％で、一人当りの実質所得は年平均２．４％も増加した。

農地の収奪も事実ではない。１９８２年、慎鏞廈教授が『朝鮮土地調査事業研究』を出版した。彼は「片手にピストルを、もう片手に測量器を抱えて」とエキセントリックな描写で記述したが、都合よく脚色されたものだった。李榮薫は実例をあげて証明しろとせまる**。１９８２年に土地調査事業の文書群が大量に発見され、それによれば、国有地を巡る紛争の審査は公正であり、日本人に有利に払い下げることはなかった。**

小説**『アリラン』**は、朝鮮人買弁が日本人巡査と結託して、農民から土地を取り上げる話で、農民が買弁に抗議し、負傷させる。すると日本人巡査が即決処分で銃殺する。それに対し**朝鮮刑事令**のどこに「巡査が即決で処刑できる」などと書いてあるかと反論する。この小説は、朝鮮人自身を「村人が罪もなく銃殺されても、黙ってみているだけの野蛮人」として描くことはないかと李榮薫は怒る。

日本の植民地支配は「法と制度と文化」を移植した。以後、**四民平等時代が到来**し、**近代的な経済開発と成長**が始まるが、究極的には、日本資本による朝鮮の資源と産業施設の所有支配になる。これを実質的な収奪と見たのが**植民地近代化論**で、その過程で朝鮮人は自らを近代人として開発した。経済が拡大し朝鮮人の所得も大きく伸びた。朝鮮にはそれだけの能力があり、それにより人材と技術と資本を蓄積した結果が**漢江の奇跡**を生み出した。

帝国主義　日本の植民地支配を見ても、軍事力が動員されたのは「３・１独立運動」の鎮圧だけだった。帝国主義支配とは精神的・文化的でもあり、新しい秩序でもあった。被支配者側の人々の中にも徐々に協力者が現れ、協力し、自分達も先進文明に発展すると信じていく。

朝鮮に居住した日本人は最大７５万であり、全人口の２．７％に過ぎなかった。農村では、巡査、教師、水利・金融組合の職員ぐらいで、５～６名で、市町村を支配はできなかった。それでも総督府の支配体制は、効果的に機能した。それは多数の自発的な協力者のお蔭だった。韓国の歴史家はこれを歴史の恥ずかしい面として直視しない。　協力者を代表する勢力は、旧来の中人身分から出た。彼等は行政事務を担当した階層で、文字を読み、計算のできる知識人だったが、両班から差別されていた。彼等は新しい情勢に逸早く対応し経済的に成功した。彼等は直接総督府の官界に進出し、官僚・議員として活躍した。彼等の子弟は日本に留学し、日本の協力者として育った。彼等は複雑だった。協力しながら抵抗し、抵抗しながら協力するという２派に分かれる。前者の代表が崔南善であり、後者が李光洙だった。

李光洙は早稲田に学んだ。最初は民族主義・独立運動の闘士だったが、その活動を通じて、朝鮮の不潔・無秩序・卑怯・無気力に絶望し、日本人のように清潔で、秩序があり、勇敢で共同する文明人として生れ変る道こそが、朝鮮民族が再生しうる道だと信じるようになる。

崔南善は「一つだけ日本人に向ってありがたいと思うことがある。それは古蹟調査事業だ。古蹟の探求と遺物の

保存について、近代的・学術的な努力が積重ねられた。しかし日本人の手で始めて朝鮮人の生命の痕跡が解明されたことは、これ以上の民族的羞恥はない」と語る。（李成市論文）

大韓民国の成立　終戦による植民地支配の終焉を、李朝・大韓帝国時代に戻ったと理解し、喜んだのが旧両班支配層だった。だが李榮薫は植民地時代には「植民地的な形態での近代化・進歩」があったと主張する。

許粋烈は「植民地時代に総所得が増加したが、すべて日本人のものだった」と主張する。だが李榮薫は「それでは私有財産制度等の近代的な経済環境が整備されても、朝鮮人はそれに順応する能力がないことになる」とし、「朝鮮人はそんな無能ではない」と主張する。さらに日本は、工場などの生産設備や鉄道などの社会資本、熟練とか企業家能力などの人的資本を残した。（木村光彦『日本統治下の朝鮮』参照）

物質的な遺産は、製鉄・製錬・電気・化学などの先端産業で、多くは北朝鮮にあり、１９６０年代までの北朝鮮の躍進の原動力となり、これが朝鮮戦争を誘発すべく金日成を誘惑した。

南朝鮮は物質的な遺産は少なかった。だが別の歴史的遺産すなわち「近代的法制度と市場経済メカニズム」が大切に保存されていた。これが戦後の経済発展の原動力となった。もう一つ、重要な遺産が人的資本である。これは朝鮮人の高い文化的な能力で高い教育水準の人材であった。

一方北朝鮮は、「近代的法制度と市場メカニズム」を否定した。これが今日の惨状を招いた。

終戦により朝鮮は解放された。だが朝鮮史学は正確な認識を議論せず、根拠もなく「自律性史観」を打ち出す。

『韓国近現代史』では「連合軍勝利の結果、光復がもたらされたことは、我々が望む方向での国家建設に障害となった」と記す。上海臨時政府の「光復軍」が朝鮮への進撃準備が完了していたと言うもので、「原爆投下により、日本降服が早まった為に進撃計画が頓挫した」と記す。だが上海臨時政府を認める国はなかった。従って、朝鮮は戦勝国側ではなく、サンフランシスコ条約に出席できず、日本に対する賠償請求権は認められなかった。

李榮薫は、我が民族はアメリカによって解放されたとする。そして「アメリカによる解放が、朝鮮民族が望む形での国家建設に障害になった」という意味は「アメリカによって民族の分断が生じた」ということだという。これは歴史教科書執筆者や検定者が『認識』の歴史観すなわち毛沢東の新民主主義革命論に基づいた結果だった。国家教育が左派に牛耳られたのだ。彼等は階級を重視し、社会主義の理想を求め、下層民の支持を受けた。一方、個人の価値と自由財産の原理を重視する商工業者、新興テクノクラート、農村の富裕層は右派に加担した。さらに地域の対立があり、地域内でも対立があった。**特に朝鮮社会には底流に両班・中人・良民・奴婢の身分対立が隠然として残った。解放後の朝鮮はこうした理念を異にする諸勢力の熾烈な乱闘劇だった。グレゴリー・ヘンダーソンは、こうした状態を「渦巻の政治」と表現した。**

１９４８年８月１３日に大韓民国が成立し、李承晩が初代大統領になった。李榮薫は大韓民国成立の意義を「自由・人権・国民主権・私有財産・市場経済という西欧起源の文明を受け入れた文明史の大転換」と評価する。

李承晩と朝鮮戦争　宋建鎬は、利承晩は王族出で反民衆的人間であり、民族分断を招き、親日派を清算せず、農地改革を地主に有利な形で実施し、反対勢力を弾圧したという。

李榮薫は、これは全くの中傷だとする。確かに李承晩の独立運動は空回りだった。彼は取巻きの頼り無さを感じた。上海に亡命したのは資力のある実力の無い両班中心の知識層である。

既に述べた李光洙ように、臨時政府にも参加した独立運動の闘士でありながら、その活動を通じて、朝鮮の不潔・無秩序・卑怯・無気力に絶望し、日本の清潔・秩序をもって共同する文明人としての道こそが、朝鮮民族が再生しえる道だと信じるようになった人物もいた。

従って、李承晩の政治テクニックは「反共自由主義の下で、大同団結を呼びかける」ものとなった。それ故北から南へ流れた同胞や共産主義に脅威を感じた人々が彼の周辺に集まった。

李承晩は農地改革で、地主に味方するよりも大衆迎合の道を選ぶ。「農地改革法案」は、農民が負担する土地の

償還額は、収穫高の３００％と定めていたが、李承晩はこれを１５０％に引下げた。かくして彼は多数の農民の支持を得、「国父」となる。彼は地主階級を切り捨てた。

当然、地主・旧支配層は反発する。しかも朝鮮戦争が始まり、李承晩政府は３日でソウルを落とされるなど、相次ぐ失政によって民心を失う。彼の最大の汚点は、既に述べたように「内閣・官僚・国会に何の指示も与えず、真先にソウルを逃出した」ことだった。

李承晩は、１８７５年、黄海道で生れ、培林学堂という通訳養成学校に入学し、西洋思想に接し、独立協会の活動に熱を入れる。中枢院の最年少議員で開化派のホープとなるが大韓帝国政府が開化派弾圧にまわると投獄され、獄中生活を送る。１９０４年、高宗の密命を帯び、アメリカに出国したがアメリカに相手にされなかった。当時はセオドア・ルーズベルトの時代だった。

ルーズベルトは大統領権限をフルに活用した大統領で、炭坑ストライキに介入し、炭坑労働者に勝利をもたらした。彼は下層階級からも人材を登用した。かくして彼は１９０４年の大統領選挙に圧勝した。共和党右派は反感を募らせたが、彼等を切り捨て、２期目は一段と革新的な政策を推し進める。

李承晩は「民主主義や大統領権限の重さ」を学んだ。李承晩はルーズベルトの手法をまね、常に大衆を見据え、大衆の支持によって政権を担当する。その為にはなりふり構わず、大統領権限を大胆に行使した。

李承晩の国民的評価が歴代大統領のなかで最低というのは、「親日派を清算できず、親日派主導で国が作られたという大衆の認識があるからだ」という。批判派は「あの時、親日派を少なくとも１０００人ぐらいは処刑しなければならなかった」という。

事実、「反民族行為特別調査委員会」が組織され、親日派が逮捕され、裁判にかけられた。だが厳重に処罰された親日派は一人もいなかった。実はこれに最も激しく抵抗したのは警察だった。当時、警察の半分以上が日本統治期から警察に勤務した人々だった。同様に実質的に李承晩政権を支える商工業者・官僚の大多数は、日本に協力しつつ、近代を学び、実践してきた人々だった。彼は親日派に頼らざるを得なかった。李承晩は彼等を登用する。だが外交面では強く出て反日・反米を掲げた。アメリカが共産主義封じこめに転じた以上、韓国をアメリカは見捨てることはできないと踏んだからだ。

反日に関しては、親日派を切り捨てる代わりに、宣伝と教育による世論誘導という形をとった。李承晩は、李朝時代の獄中で受けた拷問の傷を、日本によるものと宣伝した。だが彼を獄中から解放したのは日露戦争における日本軍による漢城占領の結果だった。大統領自ら捏造を始めた。

捏造の典型は小説『解放前後』である。主人公は「国境に３０万の独立軍が日本に宣戦布告し、迫っている」という話に感激して「３０万！なんという大軍だ。我が政府の帰還は実に壮観だろうな。」といって涙を流す。だが、帰国した臨時政府の光復軍は１００名に満たなかった。

カミングスは「朝鮮戦争は互いに相違する理念の国家をたてるための階級間の葛藤が、解放後に最終的に大規模な戦争に発展したもので、葛藤を増幅させたのは、大衆に支持された革命的な民主路線を抑圧し、少数の地主階級を擁護した米軍政にある」という。これを**「修正説」**という。１９８１年に出されたカミングスの修正説は、韓国の現代史を急進的に再解釈させた。その結果、出されたのが『認識』であった。カミングスは左翼だった。

戦後の「禁じ手の為替政策」と腐敗　李榮薫の最後の課題は「承晩時代の韓国経済の評価」である。この頃、財政の７割がアメリカの援助だった。１９４５年から１９６１年までアメリカは３１億ドル（年平均２億ドル）の経済援助を提供した。この援助を李承晩政権は「輸入代替工業化」戦略に使用した。これは工業化によって、輸入工業製品を国産品で代替させることだった。

この手段がドルの低レート政策だった。１ドル＝３００ウォンの市場為替相場に対し、強引に１ドル＝１００ウォンの公定レートを設定した。それを韓国が国連軍駐留費用の代替支払による国連に対する債権とアメリカの援助

に適用した。前者は国連軍への食糧提供などで、１００ウォンの食糧を拠出すれば、１ドルすなわち３００ウォンが返済されるのである。ぼろ儲けであった。

アメリカの援助は物質援助である。２億ドル分のアメリカ製品を無償で購入する権利だった。これを国内業者に配分した。その際、市場為替相場の３分の１の公定レートが適用されると、１００ウォンを政府に払えば、３００ウォンのアメリカ製品が手に入る。ぼろ儲けである。

李榮薫は、政府がそのような特恵を賦与した理由は、輸入業者が外国から原料と部品を買ってきて、工場を建てることを期待したからだという。そして企業家達は政府の期待通りに工場を建てた。つまり援助金差額の不正使用や横流しの不当利得はなかったという。官僚による援助の配分も実際の需要者に優先的に配分された。裁量による民間への援助の配分に関する限り、それなりの一貫性と道徳性は確保されており、それには日本の大学を卒業して銀行などで実務経験を積み、解放後にアメリカでの研修を経てきた有能で清廉な実務官僚の功績が大きいという。

このような体制が腐敗しないはずはない。李榮薫も「漢江の奇跡」を謳われた６０年代に比して、５０年代が暗くて湿っぽく記憶される理由は、政治と社会の不正腐敗のためだと認める。晩年の李承晩政権は不正選挙を画策し、結局、国民の審判を受けてハワイに亡命する。

１９５１年、後備役として招集された防衛軍兵士９万が飢えて凍死した。司令官以下の高級将校達が軍需物資を横領したからだ。軍隊だけではない。政治が不正に満ちていた。アメリカ援助資金の一部は政府から企業へ、企業から政権党へと流れる政治資金に化けていた。

以上のような不正腐敗を認めた上で、李榮薫は**「不正腐敗は、絶対的な貧困から醸し出された『自分達の文化』であり、誰も他人のせいにすることができない歴史の因果応報である」**と主張する。

日本統治下では、官の綱紀が厳しかったが、解放後にこの悪癖が復活した。日本統治時代には、上司が代われば、事務所でサイダーと菓子で歓迎会や送別会をしたものだが、解放後は妓生の侍る料亭での文化的接待に変わった。腐敗は一種の文化なのだ。

李朝時代、税収のうち国庫に納められたのは３分の１だった。李承晩時代に実勢為替レートの３分の１に公定レートを設定したことは、援助資金の３分の１が国庫に納められたに過ぎない。朝鮮王朝も李承晩時代も同じだ。

李榮薫は歴史を直視し、そこに朝鮮固有の文化能力を認め、真の光栄ある歴史観を確立し、国家の将来展望に繋げようとした。彼は事実を捏造せず、事実は事実として認める真摯な態度の中で、朝鮮の尊厳を認めようとした。

アンドレ・シュミットの『帝国のハザマで』：　新聞等の出版物によって、**「５千年前から、朝鮮は一つの民族だ」とする民族主義がいかに形成されたかを示す。**

１８９６年、最初の**『独立新聞』**が創刊され、更に**『皇城新聞』『帝国新聞』**が創刊された。１９０４年、**『大韓毎日申報』**が創刊。この時代の新聞は、大量流通の日刊紙に発展することは無かった（発行部数２～４千）。

日清・日露戦争は朝鮮人の民族意識にも重大な影響をもたらし、**中国再評価**が始まる。
『皇城新聞』は東洋の３国が結合することによってのみ、白色人種の猛攻撃から生き延びることが出来る（汎アジア主義）と主張。**だが朝鮮は日露戦争が始まると、中立を宣言して、局外に逃げてしまう。**

新聞は、当初**植民地自体は非難せず、賛美した。**『独立新聞』は英国の植民地拡張を賞賛した。『大韓毎日申報』は英国のエジプト植民地事業は莫大な資金を投下し、インフラを確立し、国造りをした。一方、日本は朝鮮を開発・近代化していない。西洋植民地主義は良いが、日本植民地主義はだめだという。

日本に対する朝鮮人の態度　日本の日清戦争勝利をみて、能力は朝鮮人が劣るはずがないから、朝鮮も栄光を取り戻すことが出来ると主張。**一方、新聞は日本に対する侮蔑の中に、慰めを見出す。**「日本は韓国の開化を被った国」。「日本が達成した事柄はすべて西洋・朝鮮起源のもので、日本独自のものは何も無い」。こうした主張は、

日本を貶めるものだった。**朝鮮人は何が何でも日本の上に立ち、日本を蔑みたかった。**（『帝国の間で』）

韓国人の日本人観　：「韓国は古来、日本にいろいろなことを教えてやった。それなのに日本は韓国を植民地にした。これは弟が兄を殴るのと同じで倫理にもとる」「西欧列強も同じことをやったのだから、日本だけ問題にするのはおかしい」という反論にたいし「韓国をアフリカや東南アジアの諸国と同列におくのはけしからん」。（山内弘一『朝鮮から見た華夷思想』）

戦後、朝鮮史学は中国に対しては半島が受けた影響を無視し、日本に対しては半島が与えた影響を誇張する傾向が強く現れ、日本ではこうした半島の民族主義的な主張を無批判に受け売りした（岡田英弘『倭国』）。

こうした考えから、朝鮮は将来、植民地を確保できると考えた。だが日本が強大になると、朝鮮の運命が殖民する側よりも殖民される側に立ちそうなことに気づく。以後反植民地に変わる。

新聞は両班支配層向けだった。彼らの民族主義は具体的なことは何もせず、問題は人口の大多数に対する有識者の比率だと兪吉濬は説明し、人民に責任を押し付ける。彼らはその人民観を**愚民**として確立した。

朝鮮は**中国中心**の儒教的歴史を否定し、新しい歴史を必要とした。『大韓毎日申報』の編集者、**申采浩**は民族が国家の基礎であり、全ての人々が民族の利益のために団結して活動すべきと主張。**檀君神話に光を当て、族譜を基礎とした歴史**を創造する。両班により保存され、支配家系樹立の手段が族譜だった。庶民・奴隷には族譜はなかった。申は、朝鮮人は**壇君以来の４千年の家譜があり、歴史は一国民の譜牒（系図）である**とした。

民族の紐帯を**檀君の末裔**という形で求め、高句麗・百済・新羅を結び付けた。

檀君は高麗時代の１２８０年ごろの**『三国遺事』『帝王韻記』**に始めて見えるもので、**『帝王韻記』では檀君は新羅・高句麗・沃沮・扶餘・**濊**・貊という古代の諸族をみな統治したという。**

檀君神話を受け入れた羅喆（ラテツ）が**「大**倧**教」**を創始した。羅喆は満州の朝鮮人亡命者の社会に布教した。檀君神話は、帝釈天の子の桓雄が太伯山に降臨し、人民を教化した。その桓雄が人間になった熊女と通じて生まれたのが檀君であり、紀元前２３３３年のこととする。

風水は、山脈を中心に土地を貫く**気**の流れ（エネルギー）である。風水上、最重要の**白頭山**は、檀君が降臨した山として脚光を浴び、国境であると同時に国の心を主張するようになった。この山は満州から**気**を集め、朝鮮半島に分配する。民族主義者は白頭山および満州は自らのものだと主張し始めた。

日帝風水謀略説：金泳三政権「歴史立て直し」事業：旧総督府庁舎の解体等の他、「日帝は民族精気を抹殺する為に全国の名山に鉄杭を打ち風水地脈を断った。歴史を清算し、国民の誇りを取り戻す為に鉄杭の除去を国民的事業として推進する」。これを閣議決定し、マスコミも大々的に取上げた。

朝鮮人の満州　　朝鮮人は広開土王碑の発見に刺激され、古代朝鮮に対する郷愁を呼び起こした。申采浩は「韓民族が満州を獲得すれば、韓民族は強勢となる」とし、朝鮮史の舞台として、満州はもう一度、朝鮮に属すべきであると主張した。

大倧**教**は**満州族全てを檀君の子孫とし**、満州族によって征服された中国・蒙古・チベット・中央アジアまで民族の領土とした。**申采浩は『乙支文徳』**で「パミールに発した朝鮮民族は東に移動し、漢民族を圧し、華中から華北・沿海州・半島に及ぶ大帝国を築いた。その指導者が檀君である」という**とんでもない史観をうむ**。

満州回復の見込みはなかったが、申は満州回復を主張し、満州における朝鮮人の尖兵としての利用を考えた。これを朝鮮史学会が支持した。さらに大倧教が１９１０年以降、満州に定着し、朝鮮移民の組織的基盤となった。

朝鮮人はアメリカ・日本等にも移住した。**申らは外国の同胞に対し祖国に忠実であることを強く勧め、政治の技術を発達させ、外国の地で「新たな国」を創造すべきことを熱心に進めた**。

「慰安婦像」だけでなく、「トヨタ・リコール」の米国での火付け役は在米韓国人が深く関わっている。最近の

「強制労働賠償提訴事件」は裏で浦項製鉄（日本の資金と技術で創立）が支援しているとロー・ダニエルは伝える

東洋倫理の敗北とは　ヘロドトスは、ギリシアは自由民の世界、ペルシアは専制政治の世界として「ペルシア戦争」を「自由」と「隷属」の戦いとして『歴史』を記述した。プラトンは「手工業者は生来の素質が不完全であり、魂も下賤な仕事の為にいじけて片輪だ」とし、商工業は奴隷の仕事だとした。奴隷は主にアジアから供給され、不完全な精神と肉体を持つとしてアジアを蔑視した。

イエズス会士は、清朝の中国文化に圧倒された。だが直ぐに中国の驚くような腐敗振りを知り、西欧は中国文明の衝撃から立ち直り、中国の腐敗を**東洋の抜きがたい悪癖**と軽蔑した。

西洋も当然腐敗する。１４世紀、**終末思想**と**コレラ禍**で絶望する人々の前に**燦然と輝く異教のローマ**が出現した。**ルネッサンス**である。だが人間性開放は頽廃へ道だった。２００人の女性を犯し海賊、殺人、強姦等で告発された教皇もいた。マキャベリは「自分の信じることを言ったことがない。自分の言ったことを信じたこともない」と語る。この腐敗・不信の世界を食い止めたのが**宗教改革**だった。腐敗の中から、西欧は倫理を確立する。新宗教は、耐え難い苦難にも、神の意志が働いていると告げた。人々は苦難に意味を見出し、苦難に耐える生の現実こそが、来世において救済されるという証拠だと信じた。この**信じ込ませることが出来た**ということが西洋倫理の勝利だった。やがてマキャベリも「イタリアに必要なのは、真面目に戦う市民兵だ」ということに気が付く。

儒教には現世をうまく処理することで、**民の側に立って民を救う**考えは無い。「支配者の側に立って善政を施す」ことで、**礼・秩序の維持が**為政の手段だった。その礼・秩序の最終形態が**朱子学**だった。

朝鮮の原点は朱子学で、「身分の規範・分相応を守れ」という格差・不平等を前提とする。

西欧社会には、自浄能力があった。それは「民衆を救う」というキリスト教聖職者の改革があった。だが東洋には自浄能力がなかった。中国の統一王朝は、腐敗で行き詰ると、外来遊牧民族の制服・転覆により蘇生してきた。秦・隋・唐・宋・元・清はすべてが外来遊牧民の王朝である。特に民衆を「夷狄禽獣」とみる朝鮮社会では「民を救う」という発想もなかった。**東洋倫理の敗北**である。

両班の傲慢　「箕子朝鮮では、箕子が犯禁８条をもたらしたが、その中に盗みを犯した人間を奴婢にするという法があり、奴婢は元々罪人であり、両班が奴婢を支配するのは世の中の風俗を正すことである」とし、奴婢・人民を**夷狄禽獣**とみた。世宗が『ハングル』を制定した時、両班は「夷狄禽獣に文字は必要ではない」と反対した。

アヘン戦争　西洋の腐敗と東洋の腐敗が正面衝突したのがアヘン戦争であった。中国腐敗の根深さを示したのが、「弛禁説」と「厳禁説」との争いであった。

弛禁説　「アヘンの密輸は取締りが難しいから、逆に合法化して、高い関税をかけ、財源確保し、さらに国内栽培を許可し、アヘン輸入を軽減し、銀の流出を抑えろ」というものであった。

厳禁論　「銀の流出はアヘンを輸入するためだが、アヘン密輸は取り締まりが困難。アヘン取引が盛んなのはアヘン吸飲者がいるためで、彼らを死罪にして需要を根絶すればよい。彼らは役立たずだから、死んでも問題はない。

両説はともに取り締まりは難しいとして腐敗現状を認めたうえで、前者は「アヘンを公認し関税をかけ、栽培まで認めれば、銀の流出が止められる」というもので、後者はアヘン取り締まりを強化し、違反者を死罪にして需要を減らして銀流出を止める」というもので、銀流出削減が第一で、人民救済は二の次であった。

朝鮮戦争　１９５０年６月２５日、　朝鮮戦争が勃発。　李承晩大統領は「韓国軍崩壊。防御線後退」の報が届くと真っ先にソウルを脱出し、水原へ向った。　国会は「ソウル死守」を決議するも、ソウル市内は大パニックとなり、陸軍もソウルを撤収した。戦線は大崩壊し、軍は敗走。人民は南に向けて大脱走した。水原に到着した李承晩は混乱し大田へ後退する。そこで「アメリカ参戦」の報に接し、３日後、釜山へ到着した。

釜山に追い詰められた韓国政府は、至る所で若者を連行し徴兵した。だが金持ちの子弟は徴発から外れ、貧乏人

の子弟だけが戦場に狩り出された。さらなる悲劇は数多くの村々で横行した虐殺だった。まず、退却する軍警が左翼を虐殺した。人民軍が入ってくると今度は右翼人士を報復として殺害する。さらに韓国軍が戻ってくると、右翼が再び左翼を報復虐殺した。こうした悲劇は、忠清道や全羅道で多かった。そのような村では、後に「このような悲劇は子供達には絶対に教えないようにしよう」と話し合われたという。

この戦争の過程で李承晩政権の性格が大きく変り、アメリカとの関係も悪化させる。参戦に当りアメリカも、こんな情けない大統領に指揮を任せるわけにはいかなかった。指揮権を剥奪したのである。緒戦惨敗で米軍に自らの軍隊の指揮権を渡さざるを得なかったことは彼のプライドを著しく傷つけた。以後彼は反米に舵を切り、アメリカの決定に悉く反対する。その最たる事件が、アメリカの日韓国交回復交渉開始の要請に対して、１９５２年１月１８日に「李承晩ライン」を引き、宣布したことだった。（木村幹『韓国現代史』）

１９５１年９月８日、サンフランシスコ講和条約調印。だがこれは１年後の１９５２年９月８日に発効する。李承晩は日本が国家として独立が認められず、したがって抗弁権も交渉権もない間隙の時期に強引に「李承晩ライン」を線引きした。（以前に竹島領有主張はアメリカに拒否された）。日本漁船が２３３隻拿捕されたが、日本には武力がなく為すすべがなかった。「李承晩ライン」は「自分の惨めさ」を覆い隠す窮鼠の策だった。

李承晩はこのサンフランシスコ講和会議に「大韓民国臨時政府」の代表として参加しようとした。だが参加はおろか、オブザーバーとしての参加も拒否された。韓国は戦勝国ではなかった。ここで韓国は歴史の捏造をやる。
韓国の歴史教科書には「独立は連合軍の勝利の結果でもあるが、わが民族の独立戦争の結果でもある」とある。韓国は戦争集結を戦勝国として敗戦国日本を裁き、賠償請求しようとした。だが韓国は連合国に加えられず、戦勝国と見なされなかった。１９４５年、モスクワ３国外相会議（米英ソ）は朝鮮の独立を認めず、神託統治とした。韓国に独立能力なしとされた。３年後の１９４８年になってようやく独立する。（黒田勝弘『韓国人の歴史観』）

私は退職後、早稲田の第２文学部で歴史を勉強した。朝鮮史の授業で、韓国からの留学生が「太平洋戦争が起きると我々の臨時政府は即時、対日宣戦布告を発表し、韓国光復軍は連合軍と共に対日戦に参加した。独立は連合軍の勝利の結果でもあるが、わが民族の独立戦争の結果でもある」というのには驚いた。この臨時政府は１９１９年の「３・１独立運動」をキッカケに生まれた上海の亡命政権だという。
そこで私が「我々にはあなた方と戦った記憶はない。いつ、どこで戦ったのか。あなた方は戦勝国と認められず、サンフランシスコ講和会議にオブザーバーとしてすら出席が許されなかった」と反論すると、彼は下を向いて沈黙した。他の学生が「韓国の国定歴史教科書にはそう書かれている」といった。
そこで私は付加えた。「韓国が戦勝国でないということは日本には賠償義務がないということだ。だが日本は経済協力資金として、６億ドルを韓国に支払った。それは当時の韓国の予算のほぼ三倍で、日本の外貨準備高の半分近くだった。それは当時の日本にとって大きな負担だった。従って反対する日本人もいた。それほど韓国に配慮した。だが私はそれでも良かったと思っている。私は長くフィリピンにいた。そこで日本軍人として戦い、戦犯として処刑された洪中将のことを知っているからだ。朝鮮人の多くは味方として戦ってくれたのだ」。
学生達は「そんな話は聞いたことがない」といった。そこで私はさらに付加えた。「私は南方からの引上げ者だ。戦争では散々辛酸を舐めさせられた。だが満州からの引上げ者はもっと悲惨だった。満州でロシア人や中国人に散々痛め付けられたからだ。だが鴨緑江を渡って、朝鮮の地に入ったらそんなことはなかったと聴いている。無論、ロシア軍や北朝鮮軍が侵入してくるまでだがね。従って日本人はそういったことについては感謝する。だが抗日戦争だの慰安婦だのといったわけのわからないことをいわれると日本人も反撃せざるを得ないね」。この話を聞いて女性の韓国人留学生が泣き出したのである。彼女は「実は私の両親は、日本時代はそんなに悪くなかったといっている。だが学校では別だ。実際はどうなのか知りたくて日本に留学した」と語った。

この科目の最後の授業でアンケートがとられた。授業参加者は韓国留学生や在日韓国の子弟が多かったが、彼等の多くが「日韓関係について、我々の常識とは全く別の面があることを知った」と率直に語っていた。

『 対待の思想 』　『易経』・易は「中正」を重視する。中国思想における「陰陽」は西洋数学の正負の絶対的対立関係ではなく、相対的なもので総合すべきものだった。この対立しつつ総合される関係を**「 対待 」**という。中国思想は、現象を対立した両面から見て総合する。この対立の交点・総合が中正なのである。簡単に言えば「足して２で割る」決着である。私は華僑とビジネスした経験があるが、彼等の交渉は、常にその前に１歩でも前に出てきて、地歩を固めた上で、前進部分について、折半しようとする。（金谷治『易の話』）

尖閣問題では、その前に排他的経済水域境界線上で石油を掘削し、１歩前に出たうえで、さらに一歩前に出て、前面の境界・領土を主張する。結果として、排他的経済水域での石油問題は宙に浮いた。

北朝鮮も同様である。原爆開発・拉致問題等、先ず１歩進んで悪事を重ねた挙句、それを取引材料にして、援助を最大限に引き出そうとしている。まさに対待の論理なのだ。

李承晩は連合国の１員としてサンフランシスコ講和条約に参加しようとしたが参加が認められなかった。韓国は戦勝国として日本を裁き、賠償金をせしめようとし、３０万の光復軍という架空の話をでっち上げた。だが韓国は戦勝国とは認められず、従って日本に賠償義務はない。１９６５年の日韓国交正常化の際、謝罪と反省は公式にはない。また日本と朝鮮の間での資金の収支は日本の方がはるかに出超だった。損害賠償請求権は日本にあった。

金正濂・元大統領秘書官の回顧録では「韓国は戦勝国ではなく、日本への賠償請求権はなかった」「植民地被支配国は『独立祝賀金』の名目で賠償的性格の資金を得るのが慣例だった」。そこで、この独立祝賀金を韓国側は「対日請求権資金」といい、日本側は経済協力資金と位置付けた。従って１９６５年の日韓国交正常化の請求権協定で、お互い過去の植民地支配に関わる相手側に対する補償請求権の要求は今後一切しないこととし、さらに経済協力資金として、無償３億・有償２億。民間融資１億を提供することで合意した。この額は当時の韓国国家予算の３倍だった。これだけの援助金を与えた上で日本の在朝鮮資産（５０億ドル）を放棄した。（夕刊『フジ』）

実は李承晩が最も恐れたのは、この日本が投資した膨大な資産の返還請求だった。その為に日本が独立し、独自の軍備が保有できない間に、海軍艦艇を増強し、李承晩ラインを設定し、竹島を占領し、２５００人に上る漁民を逮捕拉致し、漁船を拿捕した。日本は当然このような不法行為に対する損害賠償を請求すべきである。だが日韓国交正常化交渉で、これをすべて放棄した。日本は漁民を見捨てた。これで全てが決着する筈であった。だが以後の日韓交渉は、常に対待の論理の連続だった。その一例が「慰安婦問題」だった。

韓国は外交問題が起こると必ずこの問題を持ち出す。ここまでは「対待の論理」である。だがこの問題が起こると必ず、朝日新聞を初めとした妙な連中が呼応する。その代表が吉田清治であり、吉見義明だった。

この書が出版された直後に朝日新聞が吉田清治の欺瞞性を認めた。つまり意図的な「ヤラセ」である。「ヤラセ」は陰謀である。そうなるとこの問題は「対待の論理」を超えた組織的陰謀と考えざるを得ない。

このような「対待の論理」がまかり通るのは、日韓関係・日中関係だけである。朝鮮人が最も被害を受けたのは「朝鮮戦争」である。朝鮮戦争は韓国軍だけでも死亡・負傷・行方不明者は９９万名に上り、これに北朝鮮軍まで含めるとその数は１９１万になる。これに米軍の１５万、中国軍の９０万を合わせると３００万に達する。その他に民間の被害者が２００万と推定されている。

韓国は、１９９０年にソ連と国交を樹立し、１９９２年には中国と国交樹立した。当然、謝罪問題・賠償問題が発生してしかるべきである。

駐韓ロシア大使は、韓国紙とのインタヴューで「旧ソ連は朝鮮戦争について謝罪していない。」と追求され、「旧ソ連の問題をロシアがなぜ謝罪しなければならないのか」と反論した。韓国はソ連にも謝罪要求していたが、

ソ連は応じなかった。韓国はそれ以上追及できなかった。

中国も、国交正常化交渉において、「歴史を回顧するために交渉したものではない」として遺憾表明を否定した。初代韓国駐在大使張庭延も「遺憾表明の必要はない」と言明した。

ここでも韓国はこれ以上追及できない。それどころか平気で事実を捏造する。韓国李相玉外相は「冷戦時代の対立は植民地侵奪という韓日間の過去の問題とは性質が異なる」などシャーシャーとして言う。これが数百万の自国民を殺された国の外相の言う言葉だろうか。

金泳三は河野談話を受けて、慰安婦問題について１件落着を宣言した大統領だった。だが彼は「補償を要求しないことで道徳的優位に立ち、今後は日本に対しては真相究明と謝罪・反省を求めていく」と変り、「当事者の納得する措置」を求めるという態度に変る。　次ぎの金大中も「慰安婦問題で補償請求しない」としながら、「だから強制を認めて謝罪してくれ」と蒸し返す。

日韓交渉は大統領すら信用できないいいかげんな交渉である。このような手合いに対処するには日本も１歩先に進むことである。相手の無茶な要求には反応せず、相手の弱点をつくことだ。日本も対待の論理で対抗することである。韓国は慰安婦から挺身隊、最近では性奴隷などと言い出した。だが最悪の性奴隷が存在したのは朝鮮だった。『朝鮮紀行』は次ぎのように記述した。

朝鮮には伎生がいた。伎生とは日本の芸者と似ているが、伎生の大半は政府の所属で公務員である。貧しくて子を養いきれない場合、親は息子を宦官として、娘を伎生として献上する。その役割は上流階級の男性に伽をすることだ。だが伎生はまっとうな階級から外され、日本では芸者が貴族や政治家の妻になることがあるのに、朝鮮の男性はそんなことは夢にも思わない。

以上から、朝鮮支配階級は、貧乏人の子供を、男は宦 官 に、女は伎生として慰み者にした。これ以上の性的虐待があろうか。日本には宦官はいない。宦官が存在しない文化は日本だけである。

韓国が慰安婦像を建てるというなら、日本人は「朝鮮人犯罪碑」を建てればよい。この本の最初に、犯罪白書の事実を提示したのはその為である。

参 考 文 献

黒田勝弘　『韓国人の歴史観』　文春新書　平成１８年

山内弘一　『朝鮮から見た華夷思想』　山川出版　２００３

岡崎勝世　『世界史とヨーロッパ』　岡崎勝世　講談社現代新書　２００３

水野直樹　『創氏改名』　岩波新書　２００８

梶村秀樹　『朝鮮史』　明石書店　２００７

室谷克巳　『日韓がタブーにする半島の歴史』　新潮社　２０１０

若狭和朋　『日本人が知ってはならない歴史』　朱鳥社　２００４

吉見義明　『日本軍「慰安婦」制度とはなにか』　岩波書店　２０１０

黄文雄　『韓国は日本人がつくった』　徳間書店　２００２

林広茂　『等身大の韓国人、等身大の日本人』　タケハヤ出版　１９９６

水間政憲　『日韓併合』の真実　徳間書店　２０１０

岡田英弘　『倭国』　中公新書　１９９７

宮崎博史　『両班』　中公新書　１９９５

山之内靖　『マックス・ウェーバー入門』　岩波書店　２００９

糟谷憲一　『朝鮮の近代』　山川出版社　２００３

小島毅　『東アジアの儒教と礼』　山川出版社　２００４

木村幹　　『韓国現代史』　中公新書　２００８
エイドリアン・ブゾー　柳沢佳子訳　『世界の中の現代朝鮮』　明石書店　２００７
保阪正康・東郷和彦　『日本の領土問題』　角川書店　２０１２
李榮薫　永島広紀訳　『大韓民国の物語』　文芸春秋　２００９
イサベラ・バード　時岡敬子訳　『朝鮮紀行』　講談社学術文庫　２００７
イサベラ・バード　時岡敬子訳　『日本紀行』　講談社学術文庫　２００８
ブルース・カミングス　横田安司・小林知子訳　『現代朝鮮の歴史』明石書店２００３
村上重良　『世界宗教事典』　講談社学術文庫　２００６
金谷治　　『易の話』　講談社学術文庫　２００６
小島裕馬・宇野哲人　『中国の古代哲学』　講談社学術文庫　２００３
アンドレ・シュミット著・糟谷憲一訳『帝国のはざまで』名古屋大学出版会 2007
渡辺幾治郎　『日清日露戦争史話』　千倉書房　１９３７
海野福寿　『日清・日露戦争』（日本の歴史１８）　集英社　１９９２
礪波護・武田幸男『世界の歴史・６』「隋・唐帝国と古代朝鮮」　中央公論新社１９９７
韓永愚著・吉田光男訳　『韓国社会の歴史』　明石書店　２００３
　池明観　　『韓国近現代史』　明石書店　２０１０
羹在武彦　『歴史物語　朝鮮半島』　朝日新聞社　２００６
島田虎次　『朱子学と陽明学』　岩波書店
貝塚茂樹　『植民地主義と歴史学　その眼差しが残したもの』「コロニアリズムと近代歴史学」李成市　刀水書房　２００４
『コロニアリズムと朝鮮文化総督府「古蹟調査事業」をめぐって』早稲田大学朝鮮文化研究所　２００６
ベネディクト・アンダーソン著　白石さや・白石隆訳『増補　想像の共同体』　NTT 書房　１９９７
吉村昭　『ポーツマスの旗』　１９７９
趙景達　『近代日朝関係史』　有志社　２０１２
木村光彦『日本統治下の朝鮮』　中公新書　２０１８

参 考 資 料

イサベラ・バードの吸血鬼・腐敗両班官僚への糾弾　　『朝鮮紀行』は両班官僚への腐敗糾弾記事が最後まで至る所に現れる。その主なものを、講談社学術文庫の『朝鮮紀行』で、その所在ページを付して挙げる。

１．　**朝鮮が国として存在するには、他国の保護状態におかれることが絶対必要。民は絶望的に腐敗しきった行政の重荷に喘いでいる。**［４頁］
２．　朝鮮人には猜疑心・狡猾さ・不誠実さがあり、男同士の信頼はない。［２４頁］
３．　朝鮮にも収賄と汚職があり、どこの官庁も不正で腐敗している。［５０頁］
４．　宦官は、宮廷内の地位と術策のうまさで国政に多大の影響を及ぼしている［７９頁］
５．　「稼いでいる」と噂され、ゆとりを得たという評判が流れた者は、強欲な官吏に目をつけらたり、両班から借金を申し込まれる。借金は返済されない。［１１０頁］
６．　人々は汚く、通りは臭く、最悪なのは役所で・・・貧困と投げやりと憂鬱が極度に蔓延っていた。門内には庶民の生き血をすするものたちが大勢いる。［１１９頁］
７．　驪州には名門両班が多い・・・長官はソウルに住み、廃屋化した庁舎でふんぞり返っている男が代わりに仕事を行い、官職の役得を仲間に割当てる。好き勝手にやられても「両班」はまるであずかり知らない。これはここに限ったことではない。［１２０頁］

８．　**商人・農民が金を貯めたという評判が立てば、両班か官吏が借金を求めてくる。これは実質的な徴税であり、もし断ろうものなら、その男は偽の負債をでっち上げられて投獄され、本人または身内が要求額を支払うまで毎日鞭打たれる。しかし元金も利息も戻ってこない。［１３８頁］**

９．　高級官僚や両班はお付の行列を連れ、贅沢な食事をとる。村の宿屋に泊るときは、全て最上のものが供されるが代金は支払われない。関子（通行手形）を持った外国人も同様で、彼等が現れると村は恐慌をきたす。従ってイサベラは関子を持っていたが、これを隠し、一度も使わなかった。［１６８頁］

１０．　東学党の檄文には腐敗官僚と大逆的な政府顧問に対して蜂起すると述べる一方で、王室に対しては忠誠を示した。このことから朝鮮に憂国の脈動があるとすれば、それは農民の胸の中にあるように思われた。

１１．　東学党に共鳴する外国人もいた。何故なら、あまりの悪政・非道・腐敗に対して、頻発する農民蜂起を超えた規模で武装抗議するための機は熟していると考えられたからである。［２２９頁］

・　東学党の檄文には、「官僚は私利私欲のために、民衆を苦しめている悪事について国王に報告しないこと」「彼等は国の繁栄に無関心で、私腹を肥やす事に夢中で、彼等の収奪行為を取り締まるすべが無いこと」「科挙試験は贈収賄・取引・売買の場以外の何物でも無いこと」**「彼等は敖慢で、虚栄心が強く、姦通に耽り、貪欲で、平和時には媚びへつらい、有事には逃げ出すこと」**等が列挙されていた。［２３２頁］

１２．　堕落官僚の浄化に日本は着手したが、困難極まりなかった。名誉と高潔の伝統は、何世紀も前に忘れ去られ、公正な官吏の規範は存在しない。朝鮮には階層が盗む側と盗まれる側の二つしかない。搾取と着服は上層から下級官吏に至るまで、全体の習わしであり、どの職位も売買の対象になっていた。［３４４頁］

１３．　**朝鮮の官僚は大衆の「生き血をすする吸血鬼」**である。政府官僚の大半は、どんな地位にいようが、ソウルで社交と遊興の生活をおくり、地元の仕事は部下に任せている。しかも在任期間がとても短いので、任地の住民を搾取の対象として捉え、住民の生活向上については考えようともしない。［３９２頁］

１４．　地方官僚は生活給をもらわず、農民から独自に搾取して生活していた。そのカラクリは、ある事業の費用のため道知事が各戸に穴あき銭１００枚を要求すると、郡主はそれを２００枚に、また郡主の雑卒が２５０枚に増額して農民から徴収する。こうして雑卒が５０枚。郡主が１００枚、ピンハネする。［４２４頁］

１５．　搾取の手段は強制労働・税の水増し・訴訟の際の賄賂等であり、既に述べた強制借金踏み倒しがあった。だから農民は金ができると埋めてしまう。［４３４頁］

１６．　伎生は歌舞のできる女のことで、日本の芸者と似ているが、伎生は政府所属で俸給をもらう公務員である。ソウルには７０人の伎生が王宮にいた。息子に恵まれても貧しくて養えない場合、親は政府に宦官として献上するが、娘の場合は伎生として献上する。そこで歌舞音曲・読み書き等の教養を身につけるが、その役割は上流階級の男性に楽しいひとときを過させる、つまり伽をすることであった。［４４９頁］

１７．　**伎生はどこにでもいる。国王から下級官吏に至るまで、余裕のあるものにとって伎生は宴会に不可欠な存在である。だが伎生はまっとうな階級から外され、日本では芸者が貴族や政治家の妻になることがあるが、朝鮮の男性は伎生をそのような地位に上げようなどとは夢にも思わない・［４５１頁］**

１８．　政府の機構全体が腐敗の海、略奪の機関で、あらゆる勤勉の芽という芽を潰す。職位や賞罰は商品同様に売買され、政府が衰退しても、被支配者を食い物にする権利だけは存続する。［４７４頁］

１９．　朝鮮の教育は高潔の士を輩出せず、狭量・マンネリズム・慢心・尊大・手仕事蔑視・誤ったプライド・寛容な公共心や社会的信頼を破壊する自己中心の個人主義・２０００年前からの慣習や伝統に隷属した思考と行動・視野の狭い知識・浅薄な倫理観といったものは朝鮮の教育制度の産物と思われる．［４８９頁］

２０．　**国庫には実際に徴収された税の３分の１しか入らないが、これは一つには徴収に携わる官吏が腐敗しきっているからであり**、もう一つは地方の財政管理が地方にある程度任されているからである。［４９９頁］

２１．　公金を横領する為の技巧や策略に関して朝鮮人はことのほか創意と工夫を発揮し、朝鮮の官僚の不正行為ほど根絶しにくいものはない。［５００頁］

２２．　**露館播遷後、国王はロシア公使館で自由に政務をとった。その間腐敗が復活するが、ロシアは受身にまわ**

り、朝鮮人を自業自得で苦しませ、朝鮮に「首をつるに充分なロープ」を与えた。［５３７頁］

２３．　国王が享受した自由は朝鮮にとっては益にならず、最近の政策は、総じて進歩と正義を目指した日本の支配下での政策とは対照的に好ましくない。大臣その他が職位を売り、悪人・罪人が復権する。［５３８頁］

２４．　朝鮮の軍隊（洋式装備の軍隊）の俸給は世界最高級である。しかしこの洋服と武器は朝鮮人を、市民への共感や愛国心のない、権力と役得に貪欲で粗暴な人間に変える。その粗暴さと匪賊のような性癖で人々から恐れられている。［５４２頁］

２５．　**朝鮮における司法はおしなべてひどいものである。概して「ソウル裁判所は不当に裁き、賄賂を取るくらいのことしかしていない」。**［５５２頁］

２６．　党派争いによる政変は、政治理念の闘争ではさらさらなく、官職と金銭を自由に再拝できる地位の争奪戦にほかならない。［５５７頁］

２７．　**朝鮮には階級は盗み側と盗まれる側の二つしかない**。両班・官僚階級は「公認の吸血鬼」であり、人口の８０＄を優に占める下層階級は吸血鬼に血を提供することをその存在理由とする。［５５８頁］

２８．　大蔵省ほど腐敗と乱脈を呈した省庁はない。改革を依頼された政治顧問マクレヴィー・ブラウン氏の奮闘を至るところで妨害したのは、国王の寵臣と側近、財政面で破壊的な出費を要する行為を国王にそそのかす腐敗官僚の狡猾さばかりではなかった。氏はあらゆる官庁のごまかしや詐欺や不正、信頼できる部下が皆無という状況、忌まわしい因習、官職を求めるすべての人間の個人的利害等、こうした全てが改革を目指したあらゆる努力に反対すると言う事実と対決しなければならなかった。［５５９頁］

以上は支配階級の腐敗の実態である。このような李朝朝鮮を、韓永愚は「李朝の文化とモラルは美しい宝石にも似たもので、その政治は西欧の近代民主主義と変らない水準にあった」とした。まさに歴史の捏造である。

日本を支持する欧米人　１９０５年、「日韓保護条約」が結ばれた。どの国も当然として異議を唱えなかった。

韓永愚は「保護条約は無効」と主張。皇帝は無効を訴えて、オランダのハーグで開かれた「万国平和会議」に使節団を送る。だが参加国は、朝鮮は日本の保護国として外交権を失っているとして会議に参加を拒否した。

ポーツマスでの日露講和条約では、ロシアは朝鮮における日本の優越権を認めた。米国は日本が極東の安定化に貢献することをもとめた。日本が韓国併合を通知すると、国務長官ウィルソンは「合衆国政府は日本による米国人保護の保障に満足している」と答えた。

リチャード・ラットは併合に対し「抗議の声をあげた宣教師は誰もいなかった」と記述する。

歴史家タイラー・ウッドは「朝鮮はさまよっている小舟であり、日本が岸まで引っ張っていく必要がある」と語り、朝鮮には統治能力がないと見ていた。

ジョージ・トランブル・ラッドは、伊藤博文の慈悲深さと文明化の果す役割について記述した。また彼の友人ダーラム・スティーブンスは、１９０８年にサンフランシスコで、「日本がどれほど偉大なことに取組んでいるか」について演説した時、二人の朝鮮人が発砲し殺された。

社会主義者ベアトリス・ウェッブは、１９０４年に日本人は「人間の自制心と啓蒙という点で期待される星」だと書いている．彼女は１９１１年に東アジアを旅行し、中国人は「忌まわしい人種」であり、朝鮮人も「忌まわしい人種」であることがわかったと述べている。彼女の夫のシドニーに至っては、彼等は「下等脊椎動物」であり、「もしホモサピエンスが進化しないとしたらどうなるかを、実際に私達に示すものだ」とまで語る。

一方、ベアトリスは日本の「革新的な集産主義」や開放的な精神に満ちた「啓蒙化された専門職エリート」は気に入った。ここには「未来の社会主義国家における善意に満ちた官僚制」があった。日本人は「黄色人種の姿をしているが、啓蒙化されており、神に選ばれた白人文明の伝達者なのだ」という。

アルフレッド・ステッドは、１９０６年に『偉大な日本――国家の効率性に関する一考察』を出版、「日本は、英国が国内問題を解決する為に学び得る教訓を提供してくれる」と述べた。（『伊藤博文』）